

## くまがや風土記3 名馬を生んだ古代の牧場

熊谷市史編さん室 新井 端

武蔵は名馬の産出地でした。

切手に使用された中条古墳出土の埴輪馬（東京国立博物館所蔵）をはじめ、飯塚や別府、野原などの市内各所の古墳から多くの馬形埴輪や馬具が出土し、完全な馬骨も諏訪木遺跡から見つかっています。

現在まで、馬は人との生活の傍らにあつて、乗用に農耕に運送に多大な貢献をしてきました。武士の世には軍事力の要となり、軍馬として生死の遣り取りの間にも置かれ、人馬の絆をより深めた逸話も生まれています。

市にかかわる馬と人の資料を題材に、その歴史秘話を紹介します。

市域は、台地と二大河川の沖積地が広がり、入り組んだ台地地形と島状の微高地となる自然堤防も発達しました。このような地形を利用して古代の村が営まれ、その生活と他地域との交流の中で、文物が往来し、武蔵北部を占める地域として発達します。奈良時代には、現在の国道407号に似た、南北方位のみちである「武蔵路」がありました。

これは、上野から下野を通り陸奥へ至る「東山道」から分岐し、武蔵国府に至る公道です。往路には一定区間ごとに官吏の通行を援助する役所である「駅家」が設置され、宿泊や通行用の馬を準備しました。この駅家跡は市内にも想定でき、近辺には牧場の存在も考えられます。

武蔵路は、平安時代には国の管理から除かれましたが、路線の主要部分は後の鎌倉街道に踏襲されたと考えています。発掘調査では、両側に溝を持つ幅約9mの路床が、所沢・川越で発見され、坂戸市吉田「大道の古道」（小代氏文書）を経て、東松山市—熊谷市へ向かいます。熊谷直実の讓状（1191）には、所領の西限を「村岳（岡）大道」としており、かつての武蔵路と考えられ、さらに北上し熊谷市街を抜け、「長井の渡」と呼ばれた妻沼台付近から上野へ渡河したと思われま。

このルートでは、横見郡御坂郷（冑山付近）、大里郡条里の古地名



円山遺跡出土烙印「有」

として「牧津里」「牧川里」という牧場に関連した呼称が記録されるが、現在の地名には引き継がれなかったようです。また、箕輪の円山遺跡の住居跡からは「烙印」が出土しています。その印面には、鉄材を折り曲げ束ねて造られ、深い錆に包まれてはいましたが、「有」の文字が判明しました。平安時代前期頃、当時の牧場で使用されたと思われる。

文字の意味は、地名か姓名ではないかと思いますが、まだ、解釈は定まっていません。興味深いことに、約 400 年ほど後の鎌倉時代に成立した『一遍上人絵伝』の画中、「京極四条釈迦堂」の場面に、後脚に「有」文字を印した白馬が描かれています。烙印を表現したと思われるが、奇しくも円山遺跡の烙印と同一文字です。

当時の絵巻物などには多くの馬が描かれますが、烙印まで表現されることは稀で、「有」の白馬は、実在のモデルを写したとも考えられます。そう考えると「有」は、名馬の産地を示す標章として、相応の意味が込められていたのかもしれない。

東松山市岡には、馬頭観音で有名な、上岡観音妙安寺が所在します。鎌倉時代の開創とされますが、馬の育成、通行安全を願う信仰の拠り所となり、近代まで繁盛しています。

万吉には名馬「権田栗毛」の伝承が伝えられ、三本の駒形神社にも祀られていました。熊谷駅前の銅像にその雄姿が再現されているように、万吉周辺の牧場で育った権田栗毛は直実の乗馬となって西国まで付き添い、主と別れた後、古里熊谷の地を目指して、還り着いたとされます。大事に育てられた賢い馬を地元の民たちは忘れなかったのでしょう。

平安時代以降、武士が勢力を蓄える過程で、主要な戦力ともなる馬の飼育には、常に心砕いていたはずで、村岡を拠点とした平良文は、鴻巣市箕田を拠点とした源充と馬を馳せ、弓矢を懸け合い武力を競った逸話が『今昔物語』に載せられています。市域に根を張った武士たちは、多かれ少なかれ、平良文や源充と同じく、たがいに隣合いひしめき合う中で、勢力拡張に懸命であったと思います。後に迎える源氏と平家の戦いに、彼らは勇んで参戦する理由を持っていたのです。彼らの武力を担った馬は、良文や権田栗毛の伝承に象徴されるように、その末裔として自らの領地と手で育て上げたのでしょう。

円山遺跡の立地する三方を谷津に隔てられた台地上は、尾根となる台地との接点を柵で隔てると、容易に孤立した空間を造ることができます。同様に、区画することが容易な自然堤防上や荒川の中州も、共に牧場への利用が可能です。市域では、大規模ではなくとも、小牧の立地条件に恵まれていたようです。

当時の馬牛飼育慣行をみると、秋冬は自由放牧により、牛馬の群れを分散し、越冬させることで交配も容易としました。一方、春夏は、農作物への食害と仔

馬・仔牛の産育のため牧場へ戻しています。武士も農民も野を駆け回り、家の牛馬の所在を確認し、見守るとともに、盗難や紛争を未然に避けるため、自家の烙印を付しています。民間信仰でも、水辺に馬は親しみやすく、竜神の子、竜馬を宿すことを期待されていたといえます。

古代以来、市域には牛馬を飼育する地理的・歴史的条件が備わっており、郷土の武士たちが自己の基盤を確立する重要な要素となったと考えています。

(熊谷市公連だより 第12号 平成23年より)

参考：「円山遺跡」2011 熊谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第8集